敦煌の文学

金岡照光

大蔵出版株式会社

金岡照光　かなおか　しょうこう
昭和5年埼玉県に生まれる。昭和28年東京大学文学部中国文学科卒業。現在東洋大学教授文学博士。
<現住所>八王子市本町33—9
〔著書〕「変文」「敦煌本八相押座文校釈」「敦煌変文研究の動向」「再論文淑法師」ほか。

敦煌の文学　≪大蔵選書7≫

昭和46年6月2日　印　刷
昭和46年6月10日　初版発行

定価　800円

著者　金岡照光
発行者　長宗泰造
発行所　大蔵出版株式会社
〒112 東京都文京区目白台1—17—6
振替　東京 51684 電話 (941) 1950
印刷　株式会社・厚徳社

検印
廃止
DAIZO

落丁本・乱丁本はお取り替え致します。　© Shoko Kanaoka 1971

まえがき

敦煌という土地は、今ではすでに西域の特殊な秘境ではなくなりつつある。鳴沙山千佛洞の扉が劇的に開かれてから、現在まですでに七十年の歳月が流れ、その間、歴史学、地理学、佛教学、文学、美術などさまざまな角度から写本が検討されて来た。

たしかにかつては、敦煌写本は一種の珍奇な資料として見なされる傾きはあった。砂漠の洞窟寺院に千年の眠りを経て来た写本の山は、中央アジア内陸へ通ずるキャラバンの道の風物詩と相まって、無限のロマンを人々に与えずにはおかなかった。松岡譲氏の戦前の好著「敦煌物語」（一九四二）は、古代中世のコレクションにとりかこまれた、脱俗の七十翁の口を借りて語られる、という設定になっている。現在でも、そうした興味や傾向は、敦煌という名にまつわりついているといってよい。これも現代人が追う一つの夢として、けっして否定すべきことではない。

だが、その後の研究の進展は、敦煌を単にロマンの地には、とどめておかなかった。過去半世紀の研究の結果、多くの成果が生み出されたが、それらの上に立って、今後の敦煌研究の方途を考えるとき、つぎのような意義と特色が考えられるようである。

第一には、敦煌資料はいわゆる埋没資料が発見されたケースであり、それゆえに、既成の歴史学説の上に、まったく新しい材料や見方を投げかけるものであることを挙げなければならない。敦煌の写

本は現在なお完全にそのすべてが、整理され、解読されたわけではない。これらがつぎつぎと明るみに出されていくことによって、東洋史、佛教史、中国文学史、美術史などは、さらに多くの加筆訂正を行なわざるを得なくなるであろう。

第二には、敦煌の研究は一種の総合的な学問としての性格を有することを、指摘しておかなければならない。敦煌は漢人胡人の接触流動する地であり、東西の文化の接点でもあった。当然そこに生まれる文化には独特の性質があり、中国プロパア、西域プロパアでは律し切れぬ面が包含されている。近年の敦煌研究が、敦煌文化圏の地域研究に大きな関心を寄せているのも、その一つのあらわれであろう。一つの写本の研究にあたっても、佛教、美術、文学、音楽そのほか多くの隣接科学の知識を動員しなければならぬ。こうしたいろいろな意味での総合的分析という要求は、今後もますます強まっていくに違いない。

以上の二点のほか、本書が特に注目したのは、敦煌の写本が、千年以前の西北の庶民の赤裸々な日常の記録であるという点である。過去の中国の歴史の多くがそうであったように、歴史の底辺を流れる庶民の生活と精神の記録は、文献に定着し伝承されることが稀であった。その意味で、敦煌の文献は、本来歴史の風波、興亡の衝撃により散佚してしまう運命にあった庶民の記録が、幸運にも今日まで命を長らえて来たものであった。われわれはこうした写本により、歴史に伝えられることの稀な、庶民の文化を直視することが可能になるであろう。

このことも、敦煌研究の大きな意義の一つといわなければならない。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

本書はぼう大な敦煌写本の山から、文学文献の若干を取り出して一瞥したにすぎない。それは筆者が、中国の庶民の文学を読むことを業務としているためでもあるが、同時に文学の中にこそ、庶民の日常と思想が、もっとも多面的に、かつ深層にわたって表現されていると信じているためでもある。

敦煌の文学は発見以来半世紀を閲しているにもかかわらず、一般の人びとはもとより、東洋学の分野でも、まだあまりなじみのあるものではない。写本の散在、入手可見の機会の乏しいこと、解読の困難など、もろもろの悪条件のため、研究は長い間摸索を続けなければならなかった。敦煌写本にどんな種類のものがあり、現在どの程度に整理保存されているか。そうしたことは学会においても意外に知られていない。そこで現在の段階で知りうる、そうした状態を明らかにし、敦煌写本というもののアウト・ラインを示そうとしたのが、本書Ⅰ「敦煌の写本」である。

同様の不明確さ、未知未整理の分野は、文学写本の面にも存在する。すべての敦煌文学を「変文」という名称で統一するような曖昧さは、今なお完全になくなってはいない。そこでこうした敦煌の文学の形態上の種類を紹介し、それらがどのような庶民の生活の機能と要求から生まれたものかを一瞥しようとしたのが、本書Ⅱ「敦煌文学のさまざま」である。

本書は以上の二章、すなわち敦煌の写本、とくに文学写本の資料の紹介を中心とした、いわば敦煌の文学を読む方々のための基礎篇、文献入門とでもいったものである。しかしながら、こうした文学の中に庶民のいかなる思想、感情が流れており、どのような生活が反映しているかを読みとることは、敦煌文学を読む最大の目標の一つであり、これを抜きにすることは許されない。ただ何分にもぼ

う大な文学写本であるので、そのすべてを詳述することは、この小冊のよくするところではない。そこでそうした問題へのほんの手がかりを提起する意味で、「孝」の問題をはじめ、若干のテーマをえらび、当時の庶民文学の内容へのアプローチを試みたのが、本書Ⅲ「敦煌文学のこころ」である。これは紙幅の制限もあり、数種の作品の紹介にとどまらざるを得なかった。敦煌文学の位置づけ、分布消長の調査、作品個々の紹介分析、言話文体の整理解明など、残された問題は、近く別書の体裁によって問題を提起する予定であるので、そのおり御批判を仰ぎたい。

こうしたまことにささやかな小冊ではあるが、これにより少しでも多くの方々に敦煌への興味をもって頂ければ望外の幸である。関心ある方々の御指教をお願いする次第である。

過去および現在、敦煌文学に関する専門家の方々の貴重な研究成果はかなりの数にのぼる。本書はそうした先学の御労作を多く使わせていただいた。本書の中で直接引用したもののみでなく、さまざまの示唆をあたえていただいたものも相当ある。それらの主なるものを巻末の文献において一括して示し、あわせて好学の方々の参考の一助に供した。また本書の挿図に使用した写真、地図はそうした先学の作から転載をお許し頂いたものである。本文中にも注記しておいたが、ここにあらためて御礼申し上げたい。

筆者が敦煌文学を読みはじめて、すでに二十年余になる。その間つねに浅学の筆者に指導の手をさしのべられた恩師倉石武四郎、藤堂明保の両先生、手さぐりの研究を続ける後学に、綿密懇切な御教示を惜しまれなかった入矢義高先生に対し、この場所を借りて、深甚なる感謝の意を表したい。また長い間敦煌資料の入手閲覧にあらゆる便宜をあたえて下さった過去および現在の東洋文庫敦煌室のスタッフ―池田温、菊地英夫、土肥義和の皆さんの御厚意も忘れられない。

本書がこのような形で公刊されるに至ったのは、ひとえに大正大学教授塩入良道先生の御配慮によるものである。そしてまた、遅筆の筆者をつねにはげまされ、一切の事務を処理された、大蔵出版社の神保守利さん、本書の校正に援助をいただいた目白学園の正木栄子さん、これらの方々の御厚意にあらためて御礼を申し上げる。

最後に前述のとおり本書への写真図版の提供に快諾をおあたえいただいた、松本栄一・秋山光和・梅津次郎・前田正名・松岡譲氏御遺族・神田喜一郎の諸先生には、特に深く御礼申し上げる。

就中、秋山先生が秘蔵の影片を特に本書のために提供されたこと、および東洋文庫が写本影印の転載を御許し下さったことを附記して、その深い学恩に謝意をささげる次第である。

昭和四十六年五月

金岡照光

目　次

まえがき

I　敦煌の写本

1　敦煌—砂漠の町の環境と歴史

敦煌の地理……三
古代の敦煌……七
敦煌郡の発足……九
敦煌の興亡……一二
佛教都市敦煌……一五
現代までの敦煌……二〇

2 敦煌写本の発見
敦煌石窟の状態……二四
敦煌文書の発見……二九
各国探検隊の写本搬出……三三
写本搬出に対する中国人の感情……四〇
3 敦煌写本の概要
敦煌写本の所在と整理……四六
敦煌写本の種類と性格――その形態――……六六
敦煌写本の種類と性格――その内容――……七四
II 敦煌文学のさまざま
1 敦煌文学の素材
敦煌文学の性格……八九
敦煌文学の素材……九三

2　敦煌文学の形態(一)——講唱体——
敦煌文学のさまざまな形……一〇〇
講経文……一〇一
変　文……一〇五
3　敦煌文学の形態(二)——散文体——
散文体俗文……一一〇
対話体俗文……一一三
4　敦煌文学の形態(三)——韻文体——
韻文の種類……一一八
押座文……一一八
叙事詩類——長歌と短篇——……一二三
讃文類……一二八
曲子詞……一三四
定格联章……一四九

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

通俗詩類・雑詩文類・詩文集類……一五八

5　敦煌の「語り物」

俗講という舞台……一六八

絵解き講唱――変文――……一八二

III　敦煌文学のこころ

1　佛の道と人の道――孝子物語を中心に――

中国民族と孝……二〇九

舜子変文の場合……二一四

董永変文の場合……二三七

目蓮変文の場合……二四九

孝のすすめ――敦煌歌曲の場合――……二五八

2　信仰・生活・民族

地獄と人間……二六二

神通力へのあこがれ……二六九
人生無常……二七四
歴史への対応……二七七
参考文献

I

敦煌の写本

1　敦煌—砂漠の町の環境と歴史

敦煌の地理

敦煌という地名は、最近非常に知られるようになった。井上靖氏の長篇小説「敦煌」が出版され劇化もされ、中国から大がかりな「敦煌展覧会」が来日し、各地で好評を博したのも、すでに一昔前のことになる。こうした文化的行事によって、敦煌がゴビ砂漠に近い中国の西北端の町であること、そこのお寺には古くからの佛像や壁画が多く残されていること、そこからたくさんの古文書が発見されたことなどの知識は、今ではかなり大衆的なものになっている。近年はシルク・ロード展の開催などもあって、再びこの中国西北の町への関心が高まっている。

シルク・ロード、ゴビ砂漠、天山山脈、敦煌、楼蘭。こうした地名は、われわれに、神秘と荒廃に包まれた辺境の地のイメージを呼びおこす。かつては文化の華が開き、いまは荒れ果てた国境の町の持つ、不思議な魅力が、われわれにささやきかける。広漠たる砂漠、古い文化の遺蹟機械文明に取り残された中央アジアの山々が、限りないロマンチックな想像を可能にさせる。

渭城の朝雨軽塵をうるおす、（渭城の朝の糸の雨。）

客舎青々 柳色 新なり。（柳青める旅の宿。）
君に勧む更に尽せ一杯の酒、（君よ乾盃したまえ。）
西のかた陽関を出ずれば故人なからん。（行く手に友も無きものを。）
（王維：送二元二使一安西一）

唐の詩人も、西北の地に旅立つ友人に対しては、万感迫る思いにかられたことをうかがうことができる。この「陽関」という地名に関しては古来からいろいろ異説があるが、ふつう敦煌の西南七〇キロの地とされている。スタイン（A. Stein）は、玉門関はロブ・ノール（蒲昌海）への北道の関、陽関は南道の関としているが、最近では前者は古来からの西域への本道の起点で、陽関はその後に開かれた新道の出発点という考えが強まっている（日比野丈夫「漢の西方発展と両関開設の時期について」東方学報、京都二七冊）その一方の玉門関も詩の世界にしばしば登場する。

青海の長雲雪山暗く、（青海の雲雪の山。）
孤城遙かに望む玉門関。（かなた小城の玉門関。）
黄沙百戦金甲を穿つも、（いくさの日々に破れよろい。）
楼蘭を破らずんば終に還らじ。（楼蘭とる日はいつのこと。）
（王昌齢 従軍行）

黄河遠く上る白雲の間、（雲の果まで河を上る。）
一片の孤城萬仞の山。（空つく山の捨て小城。）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com